

日本スポーツ社会学会会報

第15号

Sport
ociology

日本スポーツ社会学会

Japan Society of Sport Sociology

事務局：九州大学 1996.10.20

スポーツの過去

現在・未来を写真で語る



【図説】 オールカラー スポーツの歴史

《世界スポーツ史》へのアプローチ

稲垣正浩・野々宮徹・寒川恒夫・谷釜了正[著] / フォート・キシモト[写真]

人間にとってスポーツとは何か 歴史的視点からその本質を問う

世界が動き、スポーツも動く。いま、なにもかもが大きく変化する時代。すなわち「後近代」の始まりである。この「後近代」の視座から民族スポーツと近代スポーツとを対比し、スポーツの「現在」と「世界性」を問う。スポーツとは何か、長い歴史のスパンからの提言。歴史的に貴重な珍しい写真、迫力ある現代スポーツの写真約700余枚によって構成された大型美麗本。



B4変型判・上製・函入・264頁
4色刷り
定価18,540円

[主な目次]
序章=スポーツの編年史 / 第1章=大航海時代とそれ以降の民族スポーツ / 第2章=近代化スポーツの系譜 / 第3章=スポーツの現在 / 終章=スポーツ文化の問題状況

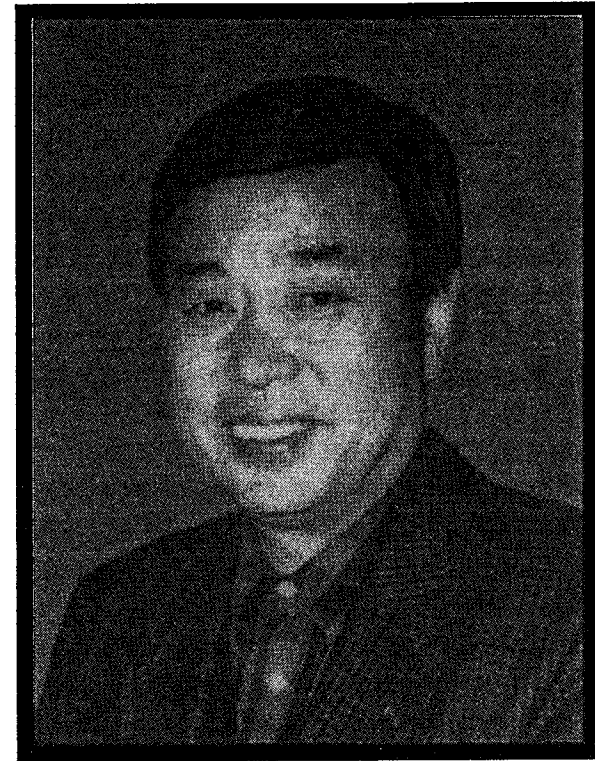
大修館書店

【書店にない場合やお急ぎの方は、直接ご注文ください】▶Tel.03-5999-5434

目次

- 《訃報》 1
- 《追悼の辞》 2
- 《諸報告》 5
 - 1. 理事会報告
 - 2. 編集委員会からのお報せ
 - 3. 研究委員会活動報告
 - 4. 事務局より
- 《日本スポーツ社会学会第6回大会・国際シンポジウム案内》 10
 - 1. 日本スポーツ社会学会第6回大会・国際シンポジウム開催要項
 - 2. 国際シンポジウムについて
 - 3. 海外招待者との交流について
- 《特別寄稿》 14
- 《研究通信》 18
- 《会員の出版物の紹介》 22
- 《海外学会通信》 24
- 《会員の動静》 28
- 《編集後記》 31

訃報



本学会会員でありました、一橋大学教授唐木國彦氏は、8月30日突然永眠されました。享年55歳でした。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

追悼の辞

衝撃！

早川武彦（一橋大学）

さる8月30日、あの唐木國彦さんが肝硬変でこの世を去っていきました。わが一橋大学そしてスポーツ社会学会みならず、日本のそして世界の体育・スポーツ界にとっても大きな痛手です。7月末の大学の水泳講習会も無事すませ、山梨で行われていたインターハイのバスケットボール大会にコーチとして請われて臨んだ後、体調を崩され、8月19日入院。わずか10日間の闘病生活で55歳の人生に幕を閉じてしまいました。

2年前、肝臓ガンが発覚し、切除か免疫療法かで選択を強いられ、世界のあらゆる情報・データを集め、専門家とも相談して決断したのが免疫療法でした。体内におけるガンや病原菌との共生の思想から発する新しい医学への道に共鳴し、それに賭けたのです。その結果、ほぼ完治したと医者からもいわれ、ご本人もそのつもりで日々過ごされていきました。今年2月に他の医者から後4ヶ月という宣告を受けながらも、それを乗りきったかに見えたのですが、危機は身に迫っていたのです。しかしそのことはいっさい他言しませんでした。愚痴をいわない唐木美学だったのかもしれませんが。

唐木さんは、類い希な能力を持っていました。背が大きいからというのではないのですが、アンテナを高く張り、最新の情報をキャッチする、好感度のセンスを身につけていました。ですから鳥瞰的に物事を把握する事が可能だったのでしょう。複雑多義にわたる討論の場において、簡単明瞭にそれらの論議を整理し、参加者がそれらの成果を共通に理解できるように導いたり、難しい理論や問題を平易な言葉や文章で分かりやすく説くなど、「成果の共有化」には人一倍心を砕いていました。その意味では飾らないタイプの学者・研究者・教育者であったのです。ですから人の意見にはよく耳を傾け、その意図するところを受け止め、感情的に人の意見や主張をはねつけることはしなかったのです。悔しくても「怒ったら負けだよ！」と言いつけるのが口癖でしたから。

独りで研究の世界に没頭する精神力には時に脅威さえ覚えるほどで、物事に対する集中力は群を抜いていました。その集中力は、英、独、露、仏、チェコ、中国と何カ国語もの語学をもものにする原動力でもありましたし、困難に直面した状況からの脱出ルートを見つけだす発想の源泉にも通じていました。その反面、人との会話やコミュニケーションを好んで楽しむ人でもありました。入院する直前、「独りでいるのはよくないね」とポツリと私に語りかけた言葉が忘れられません。萎えゆくご自分の意識や体を察知し、それを嘆いてのことだったのでしようが、請われてついた要職で、孤軍奮闘しなければならなかったことや、「成果の共有化」のための努力があまり評価されてこなかったことなどへの、一抹の寂しさを語りかけているようでもありました。

唐木さんは、また、わが国のスポーツ運動に新たな視点を導入したことで知られています。近代スポーツの先進国であるヨーロッパ諸国のスポーツ運動とその研究を紹介し、国際的な視座からわが国のスポーツ運動を盛り上げることに道を開いたのです。特に旧西ドイツにおいて留学時代に進めた「ヴァイマル期のスポーツ運動」の研究やスポーツ社会学者A. ボールの『近代スポーツの社会史』(1980)、ペーメの『後期資本主義社会のスポーツ』(1980)の本格的、学問的な翻訳・紹介などにみられるように、それらは、わが国のスポーツ研究における社会史的研究方法の嚆矢であり、先駆でもあったのです。

これらの研究は、やがて「スポーツ権論」確立の研究へと目を移していくこととなります。「ヨーロッパ：みんなのスポーツ憲章」(75年)に続くユネスコ「体育・スポーツ国際憲章」(78年)に謳われた「スポーツ権」をもとに、60年代初頭、わが国における「スポーツ権論」の主張を強固にする理論的枠組みの構築に向かいます。

その一方で、近代スポーツの普及が単一の価値思考の上でなされていることに疑問を抱き始め、そこに息苦しさを感ずき、スポーツの開放性が見失われ、逆に拘束されているのではないかと、現状のスポーツのあり方に批判的な警鐘を鳴らし始めたのです。大学生を中心に急速に広まってきたスポーツサークルや同好会、あるいは地域での多様な階層が一緒になって取り組むニュースポーツの興りにみられるスポーツの楽しみ方は、これまでのような競争、競技、記録、勝敗一辺倒でない、多様で気楽、気軽さを重視した活動となっている。しかも、これは洋の東西を問わず、世界的な現象になりつつある。その意味で、これまでの近代スポーツを「硬いスポーツ」と名付け、これに対して新しいスポーツの楽しみ方を「やわらかいスポーツ」と表現して、両者のスポーツを区別し、スポーツの発展にとって、両者の追求、とりわけ後者の承認と広がりが必要であることを主張したのです。この「やわらかいスポーツ」論は、世界各国のスポーツ状況の分析やその歴史的なルーツの資料収集もほぼ済ませ、章立も終わり、出版に向けて一気に書き始めるところだっただけに、これまた何とも悔やまれてなりません。

ところで、唐木さんのこれらの研究は、1960年代後半から取りかかった、「ジョン・ロックの教育論」(1969)、「ジョン・ロックの教育論」(続)(1970)や「プレイ論の批判的検討」(1972)において「原典」に首ったけになって進めた作業から始まっています。学生時代バスケットボール界に身を置き、東京オリンピック大会の候補選手として活躍し、卒業もせず、実業団へ引き抜かれ、選手生活に明け暮れていたのですが、ふと将来を見つめたとき、選手の置かれている状況がまったく無権利状態であることに気づき、恩師故丹下保夫先生に相談され、「戻ってきなさい」の一言で一気に研究の世界に飛び込んだのです。東京教育大学体育学部体育原理研究室に再び戻った、その翌年(1965)、新設された体育学部の修士課程に進み、丹下先生の下で本格的な研究方法を身につけ、その後一橋大学の博士課程に進むべく準備に取りかかるのですが、丹下先生の突然の他界でショックを受け、目指していた博士課程への道を断念し、一橋大学の非常勤講師として、職を得ながら「恩返し」を一念に教育・研究活動に邁進し始めたのです。以後一橋大学の助手(69)、講師(71)、助教授(73)、教授(83)への道を歩んできました。この間ドイツを中心とした欧米諸国への在外研究(1973-74、80、87-88)を得て、上記の研究へと研究基盤を着々と構築してきたのです。

「原論」から出発し、「歴史(学)」「社会(学)」を意識した研究方法を取り入れながら現代スポーツをとらえる手法は、まさしくスポーツ社会学に求められるのですが、平明に様々なスポーツ問題を解き明かすことになるのでしよう。スポーツ界以外の分野からも注目され、朝日新聞の文化欄や文芸春秋の『日本の論点』(これは7月末の依頼で未脱稿)で取り上げられるなど、多方面から「今を時めくスポーツ」の解釈や理解をめぐって求められた人でした。

そんなわけで唐木さんのスポーツ社会学への思い入れは強く、本学の大改革によってようやく今年度から新設された社会学部スポーツ社会学講座で後継者養成を夢見ていたのです。しかし、もう一方で、商学部産業文化部門(大講座)が設置され、そこにスポーツ産業論が設けられ、新たな挑戦として、私と二人でここに所属することになり、未知の新分野での取り組みを開始したところでした。10年がかりで「スポーツ産業論」を形あるものにしようとの4月から、少しずつ計画を練りはじめてきたのです。長い間大学改革に当たって、唐木さんは粉骨砕身頑張ってきたのですから、その最後のつめを前にしての他界だけに、なんとも残念だったでしょう。この点でも惜しまれてなりません。

最後になりましたが、唐木さんは、また自然科学の世界にもかなり精通しておりました。特に電気分野においてはかなりの興味と関心を持っており、オーディオ器機の組立には、専門家もビックリするほどの腕前を見せつけたものです。亡くなる数カ月前にも高性能を持った真空管アンプを、それもプリ、メインアンプともに一つ一つ部品を探し集めながら組立て、そのアンプに見合うスピーカー（タンノイのエジンバラ）も選び抜き、信じられないほどの広量域で高音域をカバーする音色を創り出したのです。なんとオーディオ雑誌編集部からそれについて原稿依頼があり、「3つの驚き」というタイトルで寄稿することになっていたのですが、これも活字でみることはできません。でも、この名器で唐木さんが最後に聴かせてくれた曲は、グリークのペールギュントでした。慈母オーゼの死を悲しみを持って聴かされたのは、唐木さんが入院する前日の夕方でした。消えゆく記憶を押し留め静かに、一言一言奥様と私に解説して下さったのが本当に最後でした。

55年と短かったとはいえ、またやり残したことが山ほどあるとはいえ、ご苦労さまでした。またお会いしましょう。

1996年10月9日

諸報告

1. 理事会報告

第III期 第4回理事会

日時：9月27日（金）15時～17時 早稲田大学人間総合研究センター一分室2階A会議室
参加理事：池井 望（会長）、宮内孝知、平野秀秋、上杉正幸、生沼芳弘、山下高行、菊 幸一、
吉田 毅（オブザーバー）

<議事及び報告>

1. 編集委員会関係

- ・機関誌第5巻の編集進捗状況について報告があった。投稿された原稿は査読に回した。原著論文は昨年度より投稿数が少なかった。また、第5巻には会員の出版物に対する書評等も掲載する予定でいる。
- ・第5巻に掲載予定の「研究業績リスト」については本会報の「編集委員会からのお報せ」の項を参照されたい。

2. 研究委員会関係

- ・今年度は「国際シンポジウム」の開催もあり、委員会を既に3回開催し、今後更に3～4回開催する予定でいる。その際の補助費を理事会経費から回すことを承認した。
- ・研究委員会の作業において、「外国向けレターヘッド」を作成する必要性が生じた。その作成費を予備費から出すことを承認した。
- ・その他は本会報の「研究委員会活動報告」の項と内容が重複するので割愛する。

3. 事務局の運営について

- ・事務局庶務担当の山本会員が、来年3月より10カ月間「文部省在外研究員」として海外に出かけることとなった。そのため、その間会計担当の吉田会員に会報の編集等も兼ねてお願いするが、その際、負担を軽減するためにアルバイトを雇うこと、及び来年度はそのための予算を計上することを承認した。

4. 会費滞納者の措置について

- ・現在会費の滞納者がいる（4年分滞納している会員が10数名いる）。当学会では、滞納による自動退会措置はとっていないが、機関誌や会報の配布等に費用がかかるため、滞納者に対する何らかの措置を検討すべきである。これについては、庶務担当の生沼理事が次回理事会で原案を提出することを確認した。その上で、事務局から会報を郵送する際には、滞納者に対して会費の払い込みを呼びかけることを確認した。

5. 第7会大会開催地について

- ・神戸大学で開催することが内定した。

（文責：吉田 毅）

2. 編集委員会からのお報せ

1. 研究業績リストの申告に関するお願い

会員間の研究上の情報交換と研究活動の活性化などを目的として、きたる3月刊行予定の『スポーツ社会学研究』第5巻に、従来の様式にもとづく「会員の研究業績」一覧を掲載する予定です。

つきましては、以下の諸点を考慮下さって、ぜひ積極的にご自分の研究業績を申告して下さい。

- a) 内容がひろくスポーツ現象の社会的側面に関するものであること。
- b) 過去5年以内(1991年以降)に公表された印刷物であること。
(但し、前回までに申告されなかった会員は1990年以降の業績も含めてよいこととします。また上記の期間内であれば、すでに申告し掲載されたものでも、再度記載して下さい。)
- c) 申告の際は『スポーツ社会学研究』第1巻の105頁から106頁に掲載されている書式に従ってください。
(なお最近のものでは第3巻の86頁から87頁もご参照下さい)。
- d) 会員は自分の研究業績を「著書・編著」、「翻訳」、「論文」及び「報告書」の4部門に大きく分類して下さい。
- e) さらに論文については、以下の「10の下位部門」に細分化して申告して下さい。具体的には、論文に下記の番号または部門名を書き添えて下さい。

- | | |
|------------------|-------------|
| (1) 理論・学説・思想 | (2) 研究方法 |
| (3) パーソナリティ・社会心理 | (4) 文化 |
| (5) 集団・組織 | (6) 教育 |
| (7) 政治・経済・労働 | (8) 社会変動・歴史 |
| (9) 社会問題・社会計画 | (10) その他 |

f) 上記、とくにd)、e)の書式を厳守下さったうえ、A4サイズの内紙にご記入下さい。

提出期限は、編集作業の都合上1996年11月30日といたします。

提出は、下記宛お願いします。

〒194-02

町田市相原町4342 法政大学内
日本スポーツ社会学会 編集委員会
平野秀秋

3. 研究委員会活動報告

研究委員会では、すでに計画されている日本スポーツ社会学会第6回大会の国際シンポジウム開催に向けて、これまで3回の委員会を開催し、また今後国際シンポジウム実行委員会の発足会議を含め計3~4回程度の委員会開催を予定しています。これまでの委員会の活動内容および今後の予定は、以下の通りです。

- 第1回研究委員会 (出席者) 池井・伊藤・上杉・山下・菊
日時: 1996年5月19日(日) 14:00~16:30
場所: 京都タワーホテル・ロビー
- 第2回研究委員会 (出席者) <理事>池井・伊藤・山下・菊
<国際シンポ関係>小椋・杉本・川口
日時: 1996年6月30日(日) 14:00~17:30
場所: 立命館大学・末川記念館
- 第3回研究委員会 (出席者) 池井・伊藤・上杉・山下・菊
日時: 1996年7月28日(日) 14:00~17:30

◎第1回~第3回を通じた審議事項

1. 第6回大会(京都)における国際シンポジウムの開催について

山下理事による原案に基づき、次のような開催骨子が検討され、研究委員会原案として承認された。

1) 開催形式

- ・日時…1997年3月26日(水)、27日(木)、28日(金) [予定]
- ・開催形態…ワークショップ及びシンポジウム

学会大会第1日目と2日目の午前中を一般発表にあて、学会大会の一環として開催する。

2) 招待者…エリック・ダニング教授(英国、レスター大学)

- アラン・トムリンソン教授(英国、ブライトン大学)
- ポシエロ教授(仏、パリ第11大学/スポーツ文化研究所長)
- ドゥ・フランス助教授(仏、パリ第11大学)
- アイヒベルク教授(デンマーク)
- ジャネット・ハリス教授(米国、ノースキャロライナ大学)
- Burn - Jang Lim 教授(韓国、ソウル大学)
- Jong - Young Lee 助教授(韓国、ソウル大学)
- ジョン・ホーン助教授(英国、ヘリオット・ワット大学)
- リチャード・グルノウ教授(カナダ、サイモンフレーザー大学)

※上記招待者には、会長により研究委員会を主体とした国際シンポジウム開催実行委員(仮称)を別途組織した上で、すでに招待状を発送した。

※この件は、本来理事会を開催し、正式に承認を得る事項であるが、招待者への通知を早急に行わなければならないため、理事にその骨子を書面にて通達し、了解を得た上で、9月開催の理事会にて正式に承認を得ることとする(実行委員会組織は後述)。

3) 招待費用及び当日開催費用について

- ・今年度科研総合(B)が通らなかったため、財政的に非常に苦しいが、上記8名の招待者については、他の基金の利用や個人レベルの招聘により何とか招待できる見込みである。
- ・国際交流基金、ブリティッシュ・カウンシル、仏外務省、日独文化会館、各新聞社、各出版社、各企業等の協力が得られるよう最大限の努力をする。
- ・国際シンポジウム前後、交流を深め、経費負担を分散するため、各大学にて招待するよう働きかける。

4) 国際シンポジウム開催実行委員会(仮称)の組織

- ・本部組織…会長池井(学会会長兼任)
学会研究担当理事…全体構成、庶務、スケジュール等
- ・研究内容担当…(統括責任者) 伊藤理事-司会者、パネラーの割り振り
(海外招待者連絡、出版企画を含む) 学会研究担当理事
- ・財政支援依頼担当…(統括責任者) 小椋会員、杉本会員、その他…
- ・交流促進担当…(統括責任者) 上杉理事(各地区) 関東・東京-宮内理事長、生沼理事
東北-中島会員
九州-松尾会員

(・会場担当)…学会大会組織委員会との協力

山下理事、川口会員

※開催実行委員会の体制としては、広く共催団体、協賛団体、賛同者を募る意味で趣意書を作成し、正式な実行委員会を11月17日に発足させる。

5) 出版企画

- ・シンポジウム、ワークショップの内容を報告する出版の企画
- ・出版社に対する支援依頼と出版企画の抱き合わせの推進
- ・国内の(とくに若手)研究者にもテーマに沿った論文発表を行うよう働きかけ、出版に参加するよう促す。

6) シンポジウムの具体的内容について

- ・荒井理事から書面にて別内容の企画提案があったが、今回は国際シンポジウムを中心に内容を企画することで一致した。
- ・ワークショップおよびシンポジウムの具体的内容については、「大会案内」を参照のこと。

2. 第5回大会シンポジウムの反省

- 1) 内容の理解度にバラツキがみられたようであり、内容の理解をより一層深めていく形式を考える必要がある。
- 2) 第6回大会シンポでは、今回の反省を踏まえてワークショップ → シンポジウムの流れをつくりながら内容の理解を深めるとともに、司会者と質問をつなぐディスカッサントをあらかじめ用意することを考える。
- 3) 1) の反省からも、研究誌上で内容をわかりやすく紹介するため、第5回シンポに関する学会誌への特別寄稿を行う。

3. 1997年度科研費およびその他の研究助成について

昨年度に引き続き、科研費その他の研究助成を積極的に申し込む。

その際、スポーツ社会学文献録を中心とするデータベース作成のための申請も考慮に入れる。

4. その他

- 1) 前理事会からの引き継ぎ事項である学術会議登録団体の申請を研究委員会の立場から理事会に働きかける。
- 2) 公式文書作成のため、外国向けレターヘッドを作成する。
- 3) インターネットの利用による国際シンポジウムの宣伝活動を行う。

◎報告事項-韓国国際スポーツ会議の状況について(山下・菊)

ワールドカップ共催に関してスポーツ社会学ができることは何かを模索している様子。日本での国際シンポの宣伝とISSA事務局長、Limソウル大学教授招聘を打診し、快諾を得る。韓国のスポーツ社会学者の中には、日本での国際シンポに強い関心を示している方々もおられ、今後も情報交換を継続する必要がある。

◎今後のスケジュール(予定)

- 1996年9月21日…第4回研究委員会-国際シンポ準備状況の確認と国際シンポ実行委員会発足のための準備
- 同年9月27日…第IV期第1回理事会-進捗状況の審議と承認
- 同年11月17日…国際シンポ実行委員会発足
- 1997年1月初旬…原稿締切り。国際シンポ原稿をディスカッサントへ送付。
- 同年1月下旬…第2回国際シンポ実行委員会-通訳、翻訳の手配と資料集の作成援助。
- 同年2月中旬…第3回国際シンポ実行委員会-資料集の最終確認と発送。

(文責:菊 幸一)

4. 事務局より

1. 年度会費の振込について

年度会費が未納となっている会員の方には、会費の振込用紙が同封されています。金額を御確認の上、同用紙にてお振り込みください。なお、日本スポーツ社会学会第6回大会・国際シンポジウム関連の振込用紙も同封されていますので、お間違えのないようお気をつけください。

2. 会員名簿の変更事項について

既に皆様のお手元にお届けいたしました会員名簿に、少なからぬミスがあることが会員の方からのご指摘により明らかになりました。本会報の最後に、ミスのあったものと新たに変更のお知らせのあったものについての情報を掲載しておきます。お手数ですがお手元の会員名簿の修正をお願いいたします。また、これ以外に記載事項の変更や修正の必要のある会員の方は、事務局宛ご一報ください。会員の皆様には大変ご迷惑をおかけしますが、何卒ご寛容の程お願い申し上げます。

3. 会報第14号の一部訂正について

会報の第14号に、一部訂正を要する箇所があります。21ページと22ページが逆に綴じられています。明らかに業者のミスですが、発見したときには既に発送済みでした。ご了解くださいますようお願いいたします。

日本スポーツ社会学会第6回大会・国際シンポジウム案内

1. 日本スポーツ社会学会第6回大会・国際シンポジウム開催要項

- 1) 日時：1997年3月26日（水）、27日（木）、28日（金）
- 2) 会場：立命館大学（京都市）
- 3) 日程：

	11:00	12:00	1:00	4:00	5:30	7:30
26日 (水) 9:00	理事会	受付	一般発表	総会	懇親会 (兼レセプション)	
27日 (木)	一般発表 (兼海外研究者一般発表)		昼食	国際シンポジウム ワークショップ (I・II・III)		
28日 (金)	国際シンポジウム I		昼食	国際シンポジウム II		
	10:00	1:30	4:00	5:00		

- 4) 大会参加申し込み、研究発表の申し込み（併せて発表抄録をご提出ください）等は、**1997年1月16日（木）**までに同封の用紙にご記入の上、下記までお送りください。研究発表抄録につきましては下記、5)の要領を熟読下さい。尚、参加申し込みをされる際には、会場準備の都合上、懇親会(兼レセプション)参加の有無、また国際ワークショップのいずれに参加を希望されるか、必ずご記入くださるようお願いいたします。併せて、申し込みと同時に参加費も同封の振込用紙によりお振り込み下さるようお願いいたします。

(申込書・抄録原稿等、送付先)

〒603-77 京都市北区等寺院北町56-1

立命館大学産業社会学部 山下高行研究室 宛

Fax : 075-464-7632 E-mail : yama@kic.ritsumei.ac.jp

(参加費・懇親会兼レセプション費、振り込み先)

郵便振替

口座番号 01060-6-35002

日本スポーツ社会学会第6回大会事務局

5) 研究発表

- ①個人の研究発表は、原則として日本スポーツ社会学会の会員に限ります。但し、今大会に限り海外研究者は、3月27日（木）午前中に予定されている「一般発表/兼海外研究者一般発表」のセッションで報告することができます。尚、同セッションでの報告は、日本語もしくは英語のいずれかで行うことができます。報告時使用言語につきましては、申し込み用紙該当欄に必ず事前にご記入くださるようお願いいたします。
- ②研究発表の持ち時間は、各題につき質疑応答を含めて30分以内としますが、発表者数によつ

て時間調整を行う場合があります。

- ③発表時の必要に応じ、スライド映写機、OHP、VTR、その他の機器が使用できます。必要な方は必ず事前に申込用紙に記入されるようお願いいたします。また、当日発表資料を配布される方は各自70部以上を持参ください。
- ④国際シンポジウム企画と併せ、「抄録集」(proceedings)を作成いたします。抄録原稿は和文もしくは英文で作成ください。印刷製本のため、抄録はワープロ等で作成し、演題、発表者名、所属を原稿冒頭にお入れ下さい。和文の場合、一題につきA4版用紙2枚、40字×40行（演題、発表者名、所属を含む）の横書きにしてください。和文の場合でも、英文のタイトル・発表者名・所属をそれぞれの項目の下に付記されるようお願いいたします。英文で作成される場合はA4サイズ3枚以内、ダブルスペースをお願いいたします。また10行程度の日本語アブストラクトをおつけ下さい。和文・英文とも全体の体裁は大会事務局で編集いたしますのでご了承下さい。
尚、抄録原稿送付の際、印刷したものと共にフロッピーディスク（ラベルに使用機種名、または使用ソフト名をご記入ください）をお送りくださるか、またはE-mailで原稿をお送りくださるようお願いいたします。但しE-mailで送られる場合でも、誤りを避けるため、必ず別に印刷された抄録原稿をお送りください。尚、図表使用の場合はいずれの場合でも必ず原版コピーをお送り下さるようお願いいたします。

⑤プログラム

個人発表の申し込み受付後、抄録集(proceedings)とプログラムを、参加申し込みをされ、併せて参加費をお振り込みいただいた方に発送いたします。2月下旬を予定しています。

6) 参加費（抄録代等含む）

- ・会員：6,000円 学生会員：4,000円
 - ・海外参加者（招待者は除く）：2,000円
 - ・懇親会（兼レセプション）：4,000円
- *同封の振込用紙にてご送金下さい。

7) その他

- ①宿舎は事務局で一定数確保してあります。必要な方は参加申し込み用紙とともに同封いたしておきます用紙にてお申し込みください。尚、数に限りがありますので先着順となります。期待に添えない場合もありますので宜しくご了承ください。
- ②個人で宿泊を予約される場合、ちょうど観光シーズンに入りますのでお早めにご予約されることをおすすめいたします。

2. 国際シンポジウム（日本スポーツ社会学会主催、後援外務省）について

・総括テーマ：『スポーツは世界を変える；How Sport Can Change The World.』

・開催主旨、目的：

各国の第一線のスポーツ社会学者と国内研究者、国内スポーツ関係者の参加により、スポーツ文化およびスポーツ社会学をめぐる国際的な相互理解を促進すると共に、日本社会におけるスポーツ文化、スポーツ社会学の発展に寄与することを目的とする。

本大会は総括テーマとして「スポーツは世界を変える」をおき、多様な理論潮流の視角から、シンポジウム、ワークショップという構成のもとで、以下のように現代社会の変化しつつあるスポーツの位置や意味を問い、スポーツの持つ変革の力を問うこととする。

- a) ワールドカップ共催の意味を問い、スポーツを通じたアジアの新しいレベルの交流や連帯を形成する可能性を模索する。
- b) 現代社会の変化、とりわけグローバリゼーションの動向や各国の社会意識や制度の変化と関わり、今日のスポーツのもつ位置や意味、その果たす役割などについて問う。
- c) 今日各国共通で生じている「国民国家のフレームの揺らぎ」という点を焦点とし、あらためて近代国民国家とスポーツとの関係性を問い、市民型スポーツをとらえる新しい理論フレームを模索する。

・海外参加者（△交渉中、他は参加確定）：

エリック・ダニング (Prof. Eric Dunning 英国、レスター大学)
アラン・トムリンソン (Prof. Alan Tomlinson 英国、ブライトン大学/前英国余暇学会事務局長)
ジョン・ホーン (Prof. John Horne 英国、ヘリオット・ワット大学)
C. H. ポシエロ (Prof. Christian Pociello フランス、パリ第11大学/フランス・スポーツ社会学会会長)
ドゥ・フランス (Prof. Jacques Defrance フランス、パリ第11大学)
ヘニング・アイヒベルク (Prof. Henning Ichberg デンマーク、「身体・スポーツ・文化研究所」)
Lim Bun Jang (ソウル大学教授、韓国スポーツ社会学会会長、次期韓国体育学会会長)
Lee, Hong-Goo (ソウル大助教授、韓国スポーツ社会学会事務局長、)
ジャネット・ハリス (Prof. Janet Harris 米国、ノースカロライナ大学)
△リチャード・グルノウ (Prof. Richard Gruneau カナダ、サイモンフレーザー大学)

■ワークショップ 3月27日(木) - (注) パネラー報告テーマはいずれもイメージ案です。

△印の演者は交渉中です

セッションI：「スポーツが変えるアジア-アジア初のW杯共催をめぐる-」

(How Sport Can Change Relations Among Asian Countries)

パネラー：△ 交渉中 「サッカーと日本文化」
ジョン・ホーン (ヘリオット・ワット大学) 「サッカー文化のグローバリゼーション」
Lee, Hong-Goo (ソウル大学) 「W杯共催と韓国社会」
中島 信博 (東北大学) 「サッカーと日本の地域社会」
コメンテーター：Lim Bun Jang (ソウル大学) / 荒井 貞光 (広島市立大学)
司会：小椋 博 (香川大学)

セッションII：「現代社会の変容とスポーツ文化」

(The Changing Society And Sport Under The Globalization)

パネラー：C. H. ポシエロ (パリ11大学) 「フランス社会と変わるスポーツ意識」
ジャネット・ハリス (ノースカロライナ大学) 「都市環境とスポーツ」
杉本 厚夫 (京都教育大学) 「消費されるスポーツ」
△リチャード・グルノウ (サイモン・フレーザー大学) 「メディア社会の展開とスポーツ」
コメンテーター：エリック・ダニング (レスター大学) / 上杉 正幸 (香川大学)
司会：菊 幸一 (奈良女子大学)

セッションIII：「スポーツと権力」

(Sport And Power In Modern Society)

パネラー：黄 順姫 (筑波大学) 「ボディ・イメージと象徴権力」
アラン・トムリンソン (ブライトン大学) 「パワー、レジスタンス、スポーツ」
ドゥ・フランス (パリ11大学) 「再生産論とスポーツ」
伊藤 公雄 (大阪大学) 「マスキュリティの形成とスポーツ」
清水 論 (筑波大学) 「ディシプリンとしての体操」
コメンテーター：ヘニング・アイヒベルク
司会：山下 高行 (立命館大学)

■全体シンポジウム 3月28日(金)

テーマ：『近代国民国家とスポーツ: Sports And The Formation Of Modern Nation-States』

基調講演：Lim Bun Jang (韓国、ソウル大学)

エリック・ダニング (英国、レスター大学)
ヘニング・アイヒベルク (デンマーク、「身体・スポーツ文化研究所」)
井上 俊 (京都大学)

ディスカッサント (discussants)：

アラン・トムリンソン (英国、ブライトン大学)
C. H. ポシエロ (フランス、パリ第11大学)
ジャネット・ハリス (ノースカロライナ大学)

司会：伊藤 公雄 (大阪大学)、リー・トンブソン (大阪学院大学)

3. 海外招待者との交流について

研究部では、当国際シンポジウムを契機に、新しいレベルで国際的な交流が進められることを願っています。そのため現在、国際シンポジウム終了後、いずれかの海外招待者を数日間お引き受けいただける大学、あるいは地域の研究ブロックを募集しています。是非とも積極的にお申し出下さい。事務局にて先方と連絡をお取りいたします。ご希望される方は大会事務局山下高行までご連絡下さい。

特別寄稿

アトランタオリンピック・女子マラソンに日本のスポーツジャーナリズムの行方を見た

杉本厚夫（京都教育大学）

もし、スポーツ放送禁止用語に「がんばる」という言葉をあげたとしたらどうだろうか。スポーツの解説はもっと知的になるのではないだろうか。いや、寡黙になってしまうかもしれない。とにかく困ったときの「がんばる」頼み。「がんばれ日本キャンペーン」に象徴されるように、日本のメディアは、スポーツを「がんばる」という言葉で語りたがる。もしスポーツジャーナリズムというものが日本にあったとしたら、もう少しましな表現をするのではないだろうか。

1. 「がんばれ日本」は聞き飽きた

特に、今回のアトランタオリンピックの女子マラソンのテレビ放送はいただけない。まず、解説が日本語になっていない。スタジアムを出てすぐの坂にかかったとき、

宮嶋「いきなり登りですからね、宮原さん」

宮原「そうなんです、試走したときも、こっから、やる気をそっとなくすような、そんな登りに感じました」

宮嶋「スタジアムを出て、すぐに登りというのは、これは選手にとっては心理的な影響などはどうでしょうか？」

宮原「しかし、今回のこのコース、さあいくぞという意味で、覚悟ができる。いい、まあ気持ちになると思いますね。もう逃げても隠れても、坂はこれから続きますので」

アナウンサーの問いかけに、全くすれ違いで、答えになっていない。これは、解説者に引退したマラソンランナーをよんでいるから、一緒に走っているような錯覚に陥っていて、息も絶え絶えに放送している。これが延々と続き、終盤に入って、「勢いはありますよ。勢いはありますから、有森さん、しっかりとその足の裏でこのアトランタのコースを踏みしめて、もう一度チャンスをつかんで下さい。もう一度ロバの背中が見られるようにがんばって欲しいと思います」と出てくる言葉はおきまりの「がんばれコール」である。そんなのは見たら分かったと言いたくなる。

いったい、解説者としての勉強をしているのだろうか。せめて、有森さんの走り方の特徴は何で、それはエネルギー効率からいってどのような利点があり、戦術からして、どこでスパートをかける必要があるのか、といった科学的な説明を加えて欲しかった。解説者は相変わらず、「この辺からが精神力です」と訳の分からない、しかも素人でも解説できるようなことしか言わない。解説者としてのプロ意識はどこにあるのだろうか。多分ないだろう。日本の解説者は全くと言っていいほどコメンテーターとしてのトレーニングがなされていない。これは、「スポーツなんて誰でも解説できる。いっちょ、元選手にでもやらせてみようか」と言った安直な考え方が、日本におけるスポーツ文化の未成熟さを生み、スポーツ文化を読み解く能力の欠如の原因になっていることに、メディアは気づいていない。

NHKの放送では、解説者はいない。アナウンサーが実況を伝えてくれる。その点では非常に聞きやすい。画面からは分からない情報を的確に伝えてくれている。しかし、どうして、この局がオリンピック全体の解説者として、原辰徳を登場させたのか、理解に苦しむ。彼の解説は東京オリンピックを思い起こさせるほど、ノスタルジックであった。そもそも、NHKの特徴はアナウンスメン

トなのであって、それに対抗して、民放が解説者を導入したという歴史的経緯がある。しかし、その伝統的なアナウンサーによる実況中継でさえ、ベルリンオリンピックの「前畑がんばれ」から脱していない。あれははじめて、ラジオで実況中継をした時代のことである。つまりラジオのアナウンスからちっとも変わっていないということである。どうしても「日本の」有森を応援してしまいう。これらの背景には、スポーツとナショナリズムが結びつくことに対する、スポーツジャーナリズムの無批判な姿勢が存在するのではないだろうか。沿道の日本の小旗が目立った。もちろん、小旗を振るといふ応援が、日本独特の応援の仕方ではあるが、ナショナリズムを必要以上に煽り立てるという感覚が、メディアの中にもないだろうか。それに対してスポーツジャーナリズムはどう考えているのかが報道から見えてこない。このようなアナウンスメントは、日本の放送が始まって以来、綿々と続けられてきた「がんばれ日本」の世界である。

これと対照的だったのが、それから1週間後に行われた男子マラソンである。これは日本人ランナーが活躍しなかっただけに、純粋にマラソンを楽しめた。マラソンとして、こんなに面白いレースはない。スタジアムに入ってくるまで、3人のランナーがデットヒートを展開し、誰が一番にゴールするのかわからない。本当にスリリングなドラマがあった。解説者やアナウンサーも冷静で、レースを分析している。そこには、ナショナリズムは見られない。実井がスタジアムに戻ってきたときに、スタンドで掲げられていた「がんばれ」の横段幕は、風化した化石のように思えた。

2. もっと知りたい情報を

いずれにせよ、われわれの知りたい情報はほとんどなく、全く素人でもできる解説しかしない。人々のあいだにスポーツというものが何たるか分からなかった時代ならいざ知らず、今日のよう

に、スポーツ情報が氾濫している状況では、全くの時代錯誤であり、情報として成立していないのである。その極めつけは、先頭に立っているロバについての情報が一切ないことだ。またそれを無名だからよく分かりませんと堂々と言ってしまふ。さらに、彼女たちはふだんの生活で、アップダウンを走っているから強いのですと、まるで、ふだんの生活で野山を駆けめぐっての狩猟生活しているような、エチオピアを未開社会と思い込み、その生活を蔑視するような発言をしてしまふ。彼女がどんなトレーニングをしているのか（たぶん科学的なトレーニングをしていると思われるが）知れないのに、よくもそんなことが言えたものだ。この情報社会で、いかにスポーツ報道関係の情報収集が遅れているのかということ暴露してしまった「事件」である。NHKの情報にしても、独自で情報収集はしておらず、大会の発表によるものだけで、アジスアベバにすんでいて（これは誰にでも想像がつく）、警察官で（別に職業を知りたくはない）、公式発表では22歳で（別に年齢にこだわることもないが、何故かニュースステーションは執拗にこだわった）、マラソンが3回目の挑戦である（ほんとうは5回目の挑戦である）程度で、われわれの知りたい情報は全然ない。われわれの知りたい情報を知らせていくのがジャーナリズムではなかったのか。明らかに情報収集の怠慢とそうさせた情報を読みとる力のなさを感じてしまふ。また同時に、そこに情報社会の落とし穴を見たような気がした。

インタビューもおきまりのお涙ちょうだいである。家族のことを訊くか、苦勞話を訊くか。相変わらずワイドショーのノリで（メンバーがそのような人達なのではないか）インタビューが続く。有森が「気持ちよく走れました」と言っているのだからそれでいいではないか。「スタートラインに立てたことがうれしかった」と言っていることで、全てを語っているではないか。ましてや「レースを少し振り返っていただいていたいいですか？」と遠慮しているが、それを訊かないで、どうしてマラソンランナーへのインタビューが成り立つのだろうか。これはマラソンというスポーツ

文化の価値を貶しめているとしか受け取れない。やはり、苦勞を思い出して、禁欲的にがんばったことで、涙を流さない絵として成り立たないような、日本のメディアの幻想が今も主流なのである。そしてついには、インタビュワーも感動して、言葉を詰まらせる。

マラソンはテレビにうってつけのスポーツである。われわれはランナーと一緒に走ることはできないし、誰もいないスタジアムで待つか、沿道で一瞬にして通り過ぎるランナーを見るかしかない。その意味で、メディアスポーツのモデル的存在にあると言えるだろう。そこで、テレビの映像はハイテクを駆使して、臨場感溢れる感動的シーンを捉えようとする。映像は、クローズアップを使ってランナーの表情を捉え、また、視線を落とすことによって、スピード感を出し、後ろから撮ることによって、まるで自分が追走しているかのような気分させてくれる。さらに画面を分割し、レース全体の様子も知ることができる。しかし、音がよくない。沿道の声援の声は聞こえるが、選手の息づかいや足音が聞こえない。さらに、それを台無しにするようなのが解説が行われている。皮肉にも、オリンピック報道の間に流れるコカコーラのコマーシャルの方が、音を見事に使い、解説がないだけに感動的だ。メディアは、身体的なコミュニケーションからするとはるかにスタジアムでのそれには劣る。そこを如何に、絵と音で演出するかなのだが、音（アナウンスや解説を含む）の方がはるかに遅れている。

新聞はどうだっただろうか。

ほとんどの新聞は、有森を一面で扱った。そして、彼女がインタビューに答えた「はじめて自分で自分をほめたいと思います」を名言として報道した。では、なぜ、1位のロバを、2位のエゴロワをほめないのだろうか。また、4位のドーレに優しい言葉をかけないのだろうか。本当に自分一人で、余裕なく走っていて、他の人のことなど考えられないのである。まさしく「がんばった（我を張った）」マラソンをして、そのマラソンのドラマと一緒に創り出した仲間への思いやりがない、といった評論は見られなかった。

無名の新人「ロバ」については、テレビよりは若干詳しく伝えている。参加した過去のマラソンで、1994年のパリマラソン11位、1995年の世界選手権19位、1996年のモロッコ・マラケシュマラソンで優勝、また、ローママラソンを2時間29分5秒で制している。これだけの成績がありながら、どうして無名なのか首を傾げてしまう。

また、テレビではあまり報道できなかった、関係者の話を載せている。特に、真木 和のふるさとの愛媛県では、町民ホールにテレビの大型画面が持ち込まれ、約500人が集まり、「よくがんばった」「最後の頑張りには涙が出た」「まだまだがんばれる」など、「がんばる」の大連呼である。がんばることが成績不振の弁解として使われている。しかし、浅利純子の後援会では、「大舞台でよく完走した」「完走に涙が出た」と「がんばる」という声すらない。これはマスコミの負けた選手への思いやりなのだろうが、余計に虚しさを感じてしまうのは、私だけだろうか。

3. スポーツジャーナリズムは何処にある

故川本信正さんが、スポーツジャーナリズムは「記録、娯楽、評論」であって、現代ジャーナリズムには「評論」がないために、単なるジャーナルになっていると言っていたことを思い出した。したがって、スポーツ新聞はエンターテイメントペーパーであって、クオリティペーパーではないとも言っていた。

相変わらずメダルの国別獲得数を争っている（京都新聞の朝刊には国別メダル数を載せなかった。ローカルペーパーのにその評論的姿勢を見た）記事にうんざりしたり、アスリートの私生活を面白おかしくワイドショー的に報道することに、何の興味も示さなくなっている大衆に気づいていないのだろうか。いや、NBCもドラマ仕立てにしているのではないかというが、これは綿密なマー

ケットリサーチによるものであるし、日本とは全くスポーツ文化の状況がちがう。さらに、日本の報道機関の構造的な問題を含んでいるのかもしれない。スポーツの報道なら誰でもできるというので、リムジンに通訳付きでアトランタに乗り込んでくる（スポーツライター・山田ゆかり談）パケーション的記者の存在が全てを物語っている。それはまるで、TBSのワイドショー問題とだぶって見えるのだがどうだろうか。

また、選手の「楽しみました」という発言を巡る様々な論議がなされているが、これも、メディアの横暴に対するささやかな抵抗ととれないこともない。彼らは、国やお金に縛られているのではなく、今やメディアの桎梏に悩んでいるのである。メディアが負けたことに対する弁解を求めず、その選手の持っているスポーツの文化性を見失っている。つまり、メディアが選手に対して尊敬の念を持って接しているのかということである。彼らは、スポーツを通して、身体で自己を表現しようとしているのであり、一つの身体芸術なのだから、そのことをまず理解し、スポーツの話をすべきなのに、つまらない質問をするから、「楽しみました」としか答えようがないのである。野茂英雄にはベースボールの話を訊き、伊達公子にはテニスの話を訊いて欲しい。

スポーツジャーナリストはスポーツ文化の話を訊ける能力と、それをわれわれに伝えるべき言葉を兼ね備えていなければ、誰も相手にしない時代がすぐそこに来ていることに気づいて欲しい。その意味で、スポーツジャーナリストは、スポーツ文化の価値をわれわれに理解しやすい形で伝える翻訳業であると思っただけで欲しい。メディアがスポーツの文化的価値を認め、スポーツ文化を育てようとする気がない限り、スポーツジャーナリズムは育たない。

誰もいなくなった浅利純子の後援会事務所で、おばあちゃんが一人ぼつんという。そしてインタビューを受けている。インタビュワーが、「でも、よくがんばりましたよね」といかにも残念そうにいつているシーンは、何故か、選挙事務所で敗戦の弁を訊いているのとだぶってしまった。やはり、スポーツジャーナリズムは政治報道のスタイルから抜け出していないのだった。

再び聞きたい。日本にスポーツジャーナリズムは存在するのかと。

今、思うこと

山内照代（甲南女子大学）

今年の4月に甲南女子大学に赴任し、この夏、初めて大学体育指導者中央研修会に参加したのがきっかけで、恐れ多くも研究通信に参加する事となった。これまでも学会、研修会、研究会などいろいろな場に出ていくことはあったが、その場で初対面の挨拶、まず聞かれることは「専門は何ですか？」である。私はこれを聞かれると毎回のように答えに困る。私の専門はあまり例のない「海洋性スポーツ」なのである。しかも大学時代の所属はヨット部で、専門のセクションがボードセーリングであった。これは俗に言う「ウインドサーフィン」である。そして、このスポーツは「スポーツ」というより「レジャー」というイメージが強い。体育の世界では、特にそう感じられる方も多いのではないと思う。一応、競技スポーツとしても数々の大会が開かれており、国体やオリンピック種目でもあるのだが、何とも説明し難く、いつも「専門は…」と言葉をにごしてしまうのである。

ということで、数少ない研究の方もまずは海洋性スポーツからスタートした。そしてそれに関連して、これからのスポーツであろうスカイスポーツにも目を向けた。どちらも歴史の浅い、新しい分野のスポーツである。

これらのスポーツは活動人口の層が類似しており、一番人口が多く、継続して活動を行っているのは、30代～40代の男性である。実際には20代の人口もいるのだが、この層は大学在学中での活動がほとんどで、卒業と同時にその活動と疎遠になる人々が多い。これらのスポーツの継続活動を阻害する代表的な問題点は、廉価といえどもある程度は必要な活動費、地理的条件が整った活動場所、さらに気象条件に大きく左右されるコンディションである。また、陸上の活動では余程のことがない限り命を落とすことはないが、海や空での活動では、いくら気を付けてもその危険性は皆無にはならない。これは最大の問題点である。これらの点から、海や空そのものを活動場所とするスポーツは一部の人達のものから未だに脱せないでいる。

以前は、私もこのような活動を夢中で行っていた訳だが、活動から離れることによって、今までは気付かなかった事が、少しずつ見えてきたように思う。新しい方へ向いていた視線が別の方向へ向きつつあるようだ。

これまで生涯スポーツにしても、自分の中に、生涯スポーツにはニュースポーツだという、極端に言えば「新しければいい」ような概念があった。ニュースポーツに触れる機会が多かったからかも知れない。しかし、これは部分的には正しいかもしれないが、よく考えるとイコールではない。ニュースポーツは本によっては、モータースポーツからスクーバダイビング、インディアカ、ダーゲットボードゴルフ等までひとくくりで定義されている。そして生涯スポーツは、スポーツが本来持っていた競技性や激しい肉体活動という「苦しい」部分を伝統的に受け入れるのではなく、「誰もが、自己の能力に応じて楽しくできる」ものとしてスポーツが受け入れられ、開発されてきたものである、とされる。これらの捉え方が、自分の中で多少偏っていたのかもしれない。

先日、行政の方と話をする機会があり、お伺いしたことには「ニュースポーツが流行るのは、スポーツを知らない世代までだ、その世代を過ぎればそれぞれが自分の望むスポーツを続けていく」とのことだった。そういう見方もあるのか、と思った。

いろいろな考えを見聞きするうち、やはり人々が長く続ける事が出来るのは、メジャーなスポーツなのではないだろうか、といった考えも出てきた。メジャーなスポーツであれば、施設があり、情報が入り、共に活動できる仲間がいて、競技団体や試合体系が完成されている。新しいスポーツではこうはいかない。

この様な中、私が「全日本グランドベテランソフトテニス大会」なるものを知ったのは、神戸へ来てからの事だった。毎年宝塚市で行われるこの大会は、今年で第26回を迎え、内閣総理大臣杯という冠がついている。マスターズスイミングのソフトテニス版といったところである。

グランドベテランとのことで、出場クラスは寿、亀、鶴、松、竹、梅の6組から成り、それぞれがトーナメントとコンソレーションの2組に分かれている。日本だけではなく中国からの参加者もあり、今年の参加者数は約400名であった。

そして、今回この大会参加者に調査を行う機会が与えられた訳であるが、大学としては第20回大会に引き続き2度目の調査であった。そこで、多少は前回の様子を聞いていたものの、実際に調査を行ってみると驚くことが多かった。郵送法にして現時点で87.5%という回答率、便箋で添付された手紙、入りきれず欄外に書かれた回答、返信用封筒の裏には住所氏名、とにかく丁寧なのである。

まだ細かな分析には入っていないが、調査用紙をながめたところ「グランドベテラン」だけあって、とにかく競技歴が長く40年、50年といった回答も普通である。年齢が90歳代の方も何人か見られた。しかしながら、早くから取り組んでいる人たちばかりかという50歳から10数年という活動歴の方もいらっしゃる。ソフトテニスとはこんなに長く続けることができる種目だったのか。

ここで、素晴らしい活動形態の一例を挙げると「活動場所—自分達所有のテニスコート、活動頻度—雨の日以外毎日、活動時間—1日3時間」である。ここまでくれば、スポーツ活動は生活の重要な一部であるといえよう。

また、調査用紙のデータを打ち込みながら、欄外や添付された便箋に記された競技に対する思いを読むうち、回答者の方々のソフトテニスに対する思い入れが伝わってきた。様々な分析結果は出ても、ここまで活動を継続してこられたのは、結局のところ「好きだから」という一言につきるのではないだろうか。

生涯スポーツとは、競技的で、したがってその参加者がともすれば特定化されやすいスポーツではなく、いつでも、どこでも、誰でも、誰とでも、いつまでも行えるスポーツだといわれている。しかし、競技的で参加者が特定されていても、それが生涯スポーツになっている人々もいるのである。これに該当するのは、ごく一部の人々かも知れないが、競技スポーツを生活に組み入れ、生涯に亘って活動を継続している人々の生涯スポーツ、このようなことを、ここでじっくり見つめてみるのはよい経験になるのではないかと今、思う。

最近の雑感

浅沼道成 (岩手大学)

私は現在全国的に遅い大学改革のまっただ中にいます。私の所属する岩手大学人文社会科学部 (S52年に教養部から学部化した学部) は、一般教育を一手に引き受けながらそれをふまえた形で専門教育 (総合学士) をしているところです。1つの改革はこの一般教育の全学体制、2つ目は教育学部の改組、そして人文社会科学部自身の改組の3つが複雑に絡み合いながら来年度の文部省への概算要求に載せるために短期集中型の検討に日々明け暮れています。教育理念はどこかに飛んでしまったようで (そんな時間はないなどと) 枠組 (組織) のみの議論になっている現状を見ながら (参加しながら)、まさに社会的な問題だなあ?と感じています。そもそも全国的に見て改革への検討が遅れたわけは、大学の体質や地域の特性が深層にあると思われまます。私も、一時九州に住んでいましたが、高校まで過ごした盛岡に戻って4年が過ぎました。当然、地域にはすんなりと馴染みましたが保守的なゆっくりとしたペースにはなかなかついていけません。こんなペースの中へ一気に改革の最終波が飛び込んできたのです。冗談でしょうが、岩手とは様々な改革が全国で終わった後に初めてそれを検討するかどうかを検討し始めるのが地域的な慣例だと言われました。まさしく保守的な地域です。それぞれの地域には地域的な何か (地域的個性) があり、それと新たなものが相互にバランスをとりながら事を運んでいってはいはじめて地域的发展が生まれてくると考えます。しかし、地域の中にはめ込まれてしまうとまさにその地域の保守的な考えに社会化されていくのです。

私は「地域 (地方) からのチャレンジ」をテーマに、主にスポーツの大衆化と競技力のアップという現在異質といわれるテーマにあえて統一的に認識しよう実践を通して考えてきました。以前、ある研究会で勉強不足の中、「地域 (地方) の競技力を向上させるためには地域の社会資源 (特にスポーツ的資源) を集中させるべきだ」と述べかなりの批判を受けた経験があります。やはり合理的で画一的な思考で地域の質 (個性) を無視した乱暴な論理だと批判されました。私自身まだ研究ノートとしてしっかりと詰めていない段階での発表で非常に勉強になりました。

東京、つくば、九州 (鹿児島)、岩手と住み、仕事やスポーツ (テニス) の関係で全国の様々な土地を訪れる機会 (複数回) が多く、様々な人たちと接し感じたことは、地域に個性 (生活・歴史) がある中で、一方で「スポーツで勝ちたい」、他方で「スポーツを普及したい」と異なる人たちからこれらの要望が投げかけられます。まだ、私自身これを統一できる論理を持っていないので「スポーツはスポーツですよ! 仲良く考えましょう」と答えているにすぎないのです。現実この2つの理念のぶつかり合い、特に相手を否定する場面によく遭遇します。私はこの両方の立場を持ち、明確な答えが示せないままに両方に努力しているだけです。確かに一部のスポーツ関係者との会話の中に出てくることですが、特に、国体に関わっている人たちの中で「地元のためになるかどうか疑問だが、天皇杯得点をとるために勝たなければならない。お金をかけてまでも選手強化をしなければならないが、終わった後はどうなるかわからない。」と話されています。私も県のテニス協会強化委員長を務め、役割は国体で天皇杯得点をとることだと言われています。残念なのかわかりませんが、未だ取れないのが現状ですが……。競技力向上の世界も論理なく別な何かの力で動かされているのです。大学では体育専攻の学生以外に対して「社会体育」関連の講義及び実技 (人文社会科学部の学生の必修授業) を担当しています。当然、悪戦苦闘しています。文系の学生にとってこの授業の位置づけが理解できていないからです。私の中にもそういった節がありますが……。大衆化の世界では、生涯スポーツということばですべてが語られ論理なき戦国時代のよ

うな気がします。研究者の中で使われている生涯スポーツとは一体どのようなことを指しているのかよくわかりません。逆に、統一した定義をしていかなければ消滅していくような気がします。その中でスポーツの大衆化 (日常化・生活化) とスポーツの高度化 (競技力の向上) は以前はピラミッドモデルで説明されてきましたが、現在はこの2つは別物だ、相容れない論理だとされているわけです。これについてはそれぞれの立場の人同士が敵対的な議論をしているような気がします。同じスポーツなのに喧嘩をしているのです。よくわかりません。しかし、これを統一的に捉える新たな論理を構築しなければスポーツそのもの (両方共) が崩壊するような気がします。

最初の改革の話に戻りますが、最近人社の中で専門教育を考えていく場合、例えば、私の所属している行動科学研究講座 (別に人社の中に保健体育講座は存在します。) の中で地域社会学や家族社会学と並んでスポーツ社会学を開講して行動科学ひいては人社の卒業生を出すという発想が、「体育ではない」からだめで、あくまで「体育の学生」を出すべきだという論調が体育関係者の中にあります。極端に言えば人社という学部の中に埋もれることが体育の結束 (パワー?) を弱めることになると思われています。よく「体育人」ということばがありますが、いい意味で体育 (スポーツ) に関わっている仲間としての代名詞ですが、一つ間違えれば、狭い閉ざされた集団という代名詞にすり替わってしまう恐れがあります。この話はあくまで教育的な側面の話で研究とは直接関わった話ではありません。しかし、体育的個性というレベルの話ですが、これには一方で保守的な地域でより保守的な守りをせざるをえない何かの力が働いていることが感じられます。この場合の保守とはネットワークが小さくコミュニケーションが広くとられていない状態を意味しています。これは体育的個性と言うことだけでは片づけられない広い問題を含んでいるわけです。地域はその地域の個性を保ちながらも社会的な変化に影響を受けながら速さに関わらず進展していく必要があります。その中で体育的個性を踏まえながらも地域的個性の枠とそれを越えた論理の視点から捉え直される問題だと思えます。

私は現在ある過疎化の進んでいる地域の地域振興の勉強会に関わっています。特に産業の振興ということで工業関係の人たちと話すチャンスがあります。地域は何にをしたらよいか行き詰まっている感じで、工学系の研究者と関わりながら新しい産業を開発してほしいということが本音に聞こえてきます。何かおかしな感じがします。産業が活発になれば地域振興が実現されるということはある程度理解できるのですが、人頼みであり、真に地域に根ざした論理が見えてこないのです。まさに地域的個性のバランスを欠いた状態です。この中で感じたことは「地域の豊かさ」ということです。産業が振興され様々な波及効果が考えられる中で、そればかりに目が行き過ぎれば日々の生活の地域的個性から生まれてくる地域の豊かさがどうなっていくのか不安です。確かに私が一時陥った単純な合理的画一化が進行しそうです。しかし、この合理的画一化 (住民の単純な要望) を取り入れられる論理を考えていく必要があります。

以上で私のまとまりのない雑感を述べさせてもらいましたが、敢えてまとめれば、地域に根ざしたコミュニケーションネットワークを確立し地域的個性の上に住民の様々な要求に応えていけるシステム (環境) を構築していく必要があると言いたいです。

会員の出版物の紹介

「サッカー狂の社会学—ブラジルの社会とスポーツ」

J. リーヴァー
亀山佳明・西山けい子訳
世界思想社

目次

はじめに—この研究の発端にかんする私的な覚え書き vii

第一章 スポーツの逆説—闘争による統合 1
社会におけるスポーツの役割 3
社交性と集合精神の表現としてのスポーツ 14
最近の研究 34

第二章 サッカー—最高の国際スポーツ 38
国際的な大会 40
対抗する他の団体スポーツ 51
サッカーのたどった幸運な歴史 56

第三章 ブラジルにおけるスポーツと社会統合 76
国内を結びつける絆 80
サッカーの全国組織 87
スポーツと政治 93

第四章 大都市におけるスポーツ—リオデジャネイロ 109
サッカークラブ 110
リオ市内のライヴァル関係 117
くじとマスメディア 125
サッカーの財政危機 137

第五章 ファンの生活におけるスポーツ 145
ファンの関与 147
ファン研究の結果 160
どういった人がファンなのか 163
ファンになる予兆 172
ファンの忠誠心 177

第六章 共有される文化シンボル—英雄、悪役、イデオロギー 188
公的人物としての選手 189
象徴としての悪役の重要性—監督と審判 193
社会移動のイデオロギー 202
大都市と地域社会における社会移動の比較 212
ペレのもつ特別な象徴的重要性 220

第七章 結びに—スポーツの重要性 226
スポーツから利益を受けるのはだれか 230
多元論か単一論か 233
性的アパルトヘイトという例外 239
スポーツは現状を維持するものか、変革を推進するものか 242

注 249

一九九五年版への序文 275
アメリカにおけるワールドカップとサッカー 277
世界の他の地域でのサッカー 288

訳者あとがき 301

※ 出版物の紹介を希望される方は、事務局までご一報ください。

北米スポーツ社会学会

野川春夫 (鹿屋体育大学)

筆者は今年で連続3年目の参加となる北米スポーツ社会学会の昨年の大会と今年の大会について紹介する。

昨年の北米スポーツ社会学会はカリフォルニア州の州都サクラメント市で第16回大会が行われた。「文化の多様性とスポーツ」をテーマとしたこの大会の様相については北村尚浩 (鹿屋体育大学) が本誌13号に報告しているので省略する。サクラメント大会は我々日本人研究者にとってはひとつのエポックとなったといえよう。それは日本のセッションを独立して開設することがプログラム委員会から要請されたからである。'94年のサヴェンナ大会の折り、ティム・カリープログラム委員長 (オハイオ州立大学) から筆者と山口泰雄 (神戸大学) 及び川西正志 (鹿屋体育大学) に日本セッションのコーディネーター就任の依頼があった。筆者が「特別テーマセッション: アジアにおける文化の多様性とスポーツ」のコーディネーターを務め、ノースキャロライナ大学のジャネット・ハリスに座長を依頼し、山口泰雄、川西正志、クン・モー・メー (韓国釜山大学) の3人が発表し、約30名ほどの聴衆を集め大変好評であった。山口と川西は、バラエティに富んだスライドと最新の統計を載せたOHPを駆使して日本の情報を発信した。また、平井 肇 (滋賀大学) と筆者が一般発表に参加し、日本の情報を積極的に発信した。日本に限らずアジアの情報は極めて少ないために、北米の研究者だけでなくヨーロッパの研究者から高い関心を持たれている。

第17回北米スポーツ社会学会は、本年11月13日から16日まで「公民権・人権: 紛争の交差点」をメインテーマとして、アラバマ州バーミンハム市シェラトンシビックセンターホテルで開催される。ティム・カリー会長のもとにプログラム委員長には、次期会長に選出されているウィスコンシン大学ミルウォーキー校のマーガレット C. ダンカン。今回のメインテーマは、バーミンハム市が公民権運動や人権運動に歴史が深いことから決定された。基調講演者の一人はミネソタ大学のアフロ・アメリカンの研究者レオラ・ジョンソンに決定している。ジョンソンは、'94年から'95年までの2年間全米中の注目を集めたO. J. シンプソンとマスメディアについて講演する。他の基調講演者とメインテーマのシンポジストはまだ未定であるが、公民権や人権問題に焦点を定めた特別セッションとバーミンハム市の活動家を招いてパネルディスカッションなどを実施することも企画している。

近年、NASSSの年次会議の開催地がなかなか決まらない。これは開催を誘致する大学にとって、会議場の確保、ホテル宿泊の団体契約、発表やシンポジウム以外のプログラムをとりまとめる煩雑さなどがあり、運営委員に多大の犠牲を強いるからである。今回はアラバマ大学のクリス・ハリナン (Christopher Hallinan) が開催地委員をかってでてくれたお陰で開催の準備が進んでいる。

昨年の第16回大会は44セッションが開催されトピックが広がりすぎた反省から、今回は32セッションに縮小された。セッション数が縮小されたが豊富な話題が提供されると予想されている。しかし、32セッションの中でもいくつかのセッションは希望者が少ないため開催されない可能性も高いといえよう。ちなみに、コロラド大学名誉教授のジョージ・セイジ担当の "Political Economy and Sport" は、参加希望者がひとりのため取り止めになっている。セッションコーディネーターの顔ぶれは新顔の多いことと、特に女性の増加 (32人中19人) が目立つ。'70年代と'80年代のビッグネームがすっかり消え、男性研究者が肩身の狭い思いをしていることや世代交代の波が窺われる。国籍別

ではカナダ3、日本1以外は全員アメリカ合衆国である。オセアニアやヨーロッパの研究者がセッションコーディネーターを依頼されないのか、自ら敬遠しているのかは判然としない。昨年は14カ国から175名の参加があり、北米を中心としてヨーロッパ、アジア、オセアニアを包括する国際学会への拡がりをみせていたのであるが、。

北米方式は、プログラム委員会がめぼしい研究者たちにセッションコーディネーターを依頼して、全員の了承を得られた時点でニューズレターを会員に送付し、発表を希望する者がセッションコーディネーターに抄録を送付して採択の可否を委ねる。各セッションの発表者は原則3名までとし、セッションコーディネーターの裁量によってディスカッションに多く時間を割いたり、或いは発表に時間の大部分を割くことができる。不採択になった希望者は、プログラム委員長に連絡される。プログラム委員長は不採択数とその領域を考慮して、新しいセッションを加えたり、同一のセッションを増やしたりして、できるだけ多くの参加者が発表できるように努力している。

今回からの新しい試みとしてポスターセッションが試験的に設けられ、研究途中の研究成果や教授法に関する新しいアイデアや、あるいは観念的な研究の立場なども発表できるように工夫されている。さらに、これまで継続されてきた大学院生セッションもあり、次期世代を担う大学院生の参加や研究発表なども積極的に奨励されている。これらの学術的なセッションの他に、バーミンハム市の公民権運動の史跡巡りや今日における人権問題の足跡をツアーする企画も組まれている。さらに、好評のレストランのタベが復活し、リラックスした雰囲気の中でいろいろな人達と出会い、語り合える機会も設けられている。

今回の主なオープンセッションを紹介すると、「スポーツ史における人種、文化、抗議」「スポーツにおける交差点: アフリカ系アメリカ人、ラテン系アメリカ人、サモア系アメリカ人」「交差点: 公民権とスポーツ」「スポーツファンと観戦者」「オリンピックメディア」「ナイキの多面性」「アジアスポーツの西洋化」「子どもと身体文化」「性、メディア、スポーツ: 同性愛恐怖症と異性愛への批判」が挙げられる。メインテーマの「交差点: Intersection」の各論を中心に、これまでの流れを引き継ぎ「人種問題」と「性問題」のテーマ、また「身体文化」のテーマや「情報化」に注目してマスメディアやインターネットを採り上げたセッションが目立つ。さらにオリンピックの年ということもあり、オリンピックに関連した3セッションが予定されている。アジア関連では、「アジアにおけるスポーツの西洋化」と題して、スポーツにおける東洋文化と西洋文化の交差点についての発表が行われる。セッションコーディネーターは昨年に引き続き筆者が引き受け、座長にはコロラド大学名誉教授のジョージ・セイジ、発表者には京都教育大学の杉本厚夫、香港中文大学のジョン・シャトルワースと筆者が予定されている。杉本は「日本人スポーツファンの西洋化」、シャトルワースは「香港中国人とスポーツ」、筆者は「日本武道の西洋化」という題目での発表となっている。

ここ数年、「Gender」と「Race」のトピックが増えすぎてしまったことと、「Gender」でも同性愛やセクシャルハラスメントの問題を取りあげて男性研究者を非難・批判する傾向があるため、セッションによっては異様な感じを受ける。この点については、学会の発起人でもあるアンドリュー・イアニキス (コネチカット大学) やジェイ・コークリー (コロラド大学) 等も認めており、「Gender」と「Race」以外の幅広いトピックについての発表や議論が必要と考えられている。今回のプログラム委員長のマーガレット C. ダンカンは、「Gender」の研究者として注目されており、次期会長という点を考えると今年の大会は興味深いものがある。なお、筆者が2年続けて引き受けているアジア/日本セッションが定着していく可能性は高く、アジアと日本のホットなトピックや情報を積極的に発信していくことがスポーツ社会学のグローバル化につながるといえよう。

(文中敬称略)

国際スポーツ社会学会大会などの報告

小椋 博 (香川大学)

7月9日から14日まで、アメリカ・ダラスにおいて国際スポーツ社会学会(ISSA)の大会が開催されました。今年はアトランタ・オリンピックの年なのでICSSPE (国際体育科学会議) 主催のオリンピック科学会議の一部として開催されました。日本のスポーツ社会学会関係では、京都教育大の杉本さんと私が参加し、それ以外にスポーツライター-山田ゆかりさんの顔もみえました。

この会議では、組織委員会主催の多くのプログラム以外に、社会学、哲学、生理学それにバイオメカニクスなど他の学会も参加していましたが、IOCと製薬会社などからのスポンサーシップのためか、会議全体が自然科学中心、それも健康増進と競技能力の向上のための研究が幅を利かせていたように思いました。

1. シンポジウムおよび一般発表

ISSAは組織委員会にたいしてもっと多くの発表時間とスペースを要求していたのですが与えられた時間はシンポジウムに2時間と一般発表に2時間(3会場同時開催)のみで、ISSAの執行部としては不満だったようです。

シンポジウムのテーマは「オリンピズムの批判的検討」で、「黒い輪」の著者、A. ジェニングスもシンポジストの一人としてはいついたため、組織委員会はスポンサーに対して大いに気を使った様子でした。

各シンポジストの名前とテーマは次の通りです。

M. マクネイル (カナダ) 「オリンピズムとメディア」

A. ジェニングス (イギリス) 「オリンピズムと企業スポーツ」

A. インガム (アメリカ) 「オリンピズムと健康」

L. ベイル・カレル (フランス) 「オリンピズムとジェンダー」

A. ジェニングスは前著以降におけるIOCや国際競技連盟に見られる腐敗ぶりを批判しました。特に'88年ソウル大会におけるボクシングの審判買収事件やIOCと企業の癒着ぶりなどを紹介しました。9月には彼の新著、"The New Lords of the Rings" がサイエンティスト社から翻訳出版される予定です。

ベイル・カレルはフランスの女性弁護士で、イスラム諸国から女性競技者が参加できないのは差別であるとして、その撤廃をIOCと当事国に働きかけている団体「アトランタ・プラス」の代表者で、その団体の活動やIOCの女性差別を禁止する憲章の規程、その規程を破っているとされるイスラム教諸国のNOCの実状などを紹介しました。

一般発表の部では、スポーツと健康、スポーツ参加における社会的障害、それにグローバル・パースペクティブから見たスポーツ、の3つのセッションに分かれて、それぞれ8から9の演題の発表がありました。例年に比べて参加者、発表ともに少なく、少しさみしい大会でした。

2. ISSA理事会報告

会議の期間中、2回の常任理事会、それに2回の拡大理事会があり、今年から4年間、拡大理事会のメンバーに私が前理事会から指名されましたので、拡大理事会に出席しました。

1) 機関紙IRSSについて

International Review of Sport Sociology は'96年末(第31巻)まで、ドイツのOldenbourg 出版社から刊行されます。しかし会費を払っているにもかかわらず機関紙が届かない、などいろいろな苦情

と問題が山積していたようです。そこで前理事会(会長はノルウエーのK. Fasting)は出版社を他に移すことを決定、探した結果、イギリスのSage Publications になり、'97年からそちらで刊行されます。しかしドイツの出版社との契約には出版の最終年限が明記されておらず、Oldenbourg はIRSSの名前の使用と、著作権の移行を認める代わりに10万ドルを要求、Sage Publicationsが5万ドル支払い、残りは同じくSageが利息無しで立て替える、という条件で決着しました。

IRSSの会員は現在200名足らず(うち日本から26名)、会費完納者は昨年で154名、これからの出版と返済が大変です。ただし会員への送付以外に一般購読が約500部あります。Sage から出されることでトラブルもなくなると思いますが、何かありましたら私にご連絡ください。それから各大学の図書館にIRSSの購入を勧めてくださるよう、お願いします。もちろん、多くの方が新しく会員になることを希望します。会費は年50ドルで、4冊のIRSSと2冊のBulletinが来ます。入会その他の連絡は以下の通りです。

Dr. Bart Vanreusel (General Secretary)

FLOK, KULeuven, Tervuursevest 101

B-3000 Leuven, BELGIUM

Phone 32 16 32 90 00

Fax 32 16 32 91 96

Email Bart.Vanreusel@flok.kuleuven.ac.be

なお今後4年間はイギリスのJ. Maguire が会長を務めます。(Email: J.A. Maguire@lut.ac.uk)。

2) ISSAのインターネット・ホームページの作成

ISSAは年2回、Bulletinを発行していますが、連絡の効率化を図るため、インターネット上にホームページを作成することになり、理事会において日本に協力を頼まれました。SosNetでこの事を伝えたところ、京都教育大学の杉本さんから好意的な返事をいただき、目下検討中です。

3) 今後の学会大会の予定

ISSAの大会の予定をお知らせします。日本からかなり多くの方が会員になっていますが、学会での発表や機関紙への投稿において、もっと積極的に参加して欲しいと要望がありました。ぜひご参加の準備をお願いします。

1997年 ノルウエー、オスロ

1998年 カナダ、国際社会学会と共同

1999年 フィンランド、ユベスキュラ

2000年 オーストラリア、シドニー、オリンピック科学会議と共同

なお会議はほとんどの場合、7月上旬に行われます。

4) その他

ISSAのBulletinにおいて、我が国のスポーツ社会学研究その他を紹介する欄があります。私のところへニュースを送っていただければ、投稿したいと思います。もちろん、事務局長宛て、直接送っていただいても結構です。またWWWが開設されれば、こちらの方への投稿(英文)もお願いします。次回のこのレターにおいて進行状況を報告します。

ニュースの送り先

電話: 0878-36-1983

ファックス: 0878-36-1652

E-mail: komuku@ed.kagawa-u.ac.jp

会員の動静

〈新入会員〉

神吉賢一（神戸大学）

佐藤彰男（大手前女子大学）

関 嘉寛（大阪大学大学院）

古川岳志（大阪大学大学院）

山内照代（甲南女子大学）

〈在外研究〉

松村和則 会員（筑波大学）は、来年6月まで「文部省在外研究員」としてカナダ・イギリスにお出
かけになります。滞在先と滞在期間は次の通りです。

〈住所等の変更・訂正〉

編集後記

日本スポーツ社会学会会報の第15号をお届けいたします。今回の会報には、来年の学会大会・国際シンポジウムの案内等、大切な情報が多々掲載されております。関わりのある事項については、今一度ご熟読ください。

さて、学会会報の役目は、こうした重要な情報を会員の皆様にスムーズに伝達することと、会員相互の意見交換の場を提供することだと思っています。学会活動の活性化に伴い、このところ会報に占める連絡事項の量が増えている一方で、私たちは、会員の皆様の声をうまく拾えていないのでは、と心配もしております。とはいえ、事務局の内気な面々は、原稿を人に頼むことがとても苦手です。何かいいたくてたまらない方、あるいはそのようにみえる方、おられましたら是非事務局宛ご一報ください。

(Yamanori)

日本スポーツ社会学会会報 第15号

発行：日本スポーツ社会学会事務局

〒816 福岡県春日市春日公園 6丁目 1番地
九州大学健康科学センター内
Tel/Fax :092-583-7847(西村)
092-583-7855(山本)
092-583-7856(吉田)

E-mail: yamamoto@ihs.kyushu-u.ac.jp
GHE00164@niftyserve.or.jp

郵便振替口座番号：00390-0-43962
加入者名：日本スポーツ社会学会事務局

メンタルトレーニングにおけるイメージ技法の展開を豊富な事例に基づき検討

イメージがみえる一スポーツ選手のメンタルトレーニング

中込四郎・土屋裕睦・高橋幸治・高野聰 編著

1996年9月20日 A5判約 220頁 定価 税込 2300円

——スポーツ選手のメンタルトレーニングにおいて、著者らが求めてきた「イメージがみえる」状態とは、選手個々の競技への関わり方を変えるものである。それは想起されるイメージの鮮明さだけで達成されるわけではなく、相当の時間とエネルギーが必要となる。本書で展開されるようなイメージトレーニングの工夫と積み重ねは、選手の日々の技術・体力トレーニングを刺激していくはずである。

筑波大学スポーツクリニック・メンタル部門が主催するメンタルトレーニング講習会の成果を元に編集。スポーツ選手、コーチ、カウンセラー必携の書！

〈主な内容〉

- 第1章 イメージをみるために
- 第2章 イメージがみえるまで ー基礎編ー
- 第3章 イメージがみえるまで ー応用編ー
- 第4章 イメージが変わると
- 第5章 イメージトレーニングの実践例
- 補遺 スポーツカウンセリングルームから
メンタルトレーニング関連用語の解説

メンタルトレーニングの知的理解から体験的理解へ

メンタルトレーニングワークブック

中込四郎・土屋裕睦・高橋幸治・高野聰 編著

B5判 207頁 定価 税込 2300円

道 和 書 院

〒171
東京都豊島区高松2-8-6

TEL (03)3955-5175
FAX (03)3955-5102

M・チクセントミハイ著 今村浩明訳

フロー体験 喜びの現象学

幸福、喜び、楽しさ、最適経験などの現象学的課題の本質を、心理学をはじめ、社会学、文化人類学、比較行動学、情報論、進化論、宇宙論、意味論を駆使し、原理的・総合的に解明した名著

四六判/378頁/2500円

世界最大のスポーツ・スペクタクル・イベント「ワールドカップ」を4度制覇したブラジル・サッカーの強さの秘密を、社会学の視点から具体的な事例を通して考察した貴重な一冊

四六判/322頁/2300円

ジャネット・リーヴァー著 亀山佳明・西山けい子訳

サッカー狂の社会学

ブラジルの社会とスポーツ

杉本厚夫著

スポーツ文化の変容

一九五〇円

●多様化と画一化の文化秩序 文化装置としてのスポーツが発信するメッセージを読み解いた労作

亀山佳明編

スポーツの社会学

一六八〇円

●プロ野球、マラソン、ゴルフ、相撲等を通して、新たな視点からスポーツの「意味」をさぐる

江刺正吾・小椋博編

高校野球の社会学

一九五〇円

●甲子園を読む 文化社会的な視点から高校野球を考察し、甲子園「神話」の深層に迫る

磯部卓三・片桐雅隆編

フィクションとしての社会

一九五〇円

●社会学の再構成 事実と虚構の境界が溶解する現代社会におけるリアリティの根拠とはなにか？

奥村和滋・濱名陽子編

へわたしを生きる

一九五〇円

●自分さがしの人間学 社会学・哲学・法学等七つの観点から、青年期にある女性たちに語る

谷 富夫編

ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために

一三〇〇円

●生活史法の独自性と有効性を明らかにしながら、その可能性を問い、社会調査のあり方を探る

佐藤 誠編

地域研究調査法を学ぶ人のために

一九五〇円

●発展途上国を舞台に社会学に関する海外調査の方法を紹介した体験的フィールド・リサーチ論

世界思想社

京都市左京区岩倉南桑原町56
TEL075(721)6506<税込定価>